【研究ノート】

『萬葉集』の諸相（一）―（三）

――表現と表記――

森田　孟

一.「てし」は王羲之

「萬葉集の筆者などといふものは、まことに暇多き大宮人で、か丶るをかしなことを為て娯んでゐたものと思はれる」とは、『五重塔』初め数々の名作を書いて、明治から昭和十年代にわたって活躍した文豪の幸田露伴（一八六七―一九四七）が、その博覧強記と慧眼で中国の先賢の事蹟を考証した随想の一篇「王羲之」（一九三七年七月）の冒頭の一節である。

　露伴をして「か丶る閑戯」と言わせたのは『萬葉集』のある表記に関してのもので、彼は次の三首を挙げた。

●標結ひて我が定めてし住吉の浜の小松は後も我が松（③三九四）[1]

●石上降るとも雨につつまめや妹に逢はむと言ひてしものを（④六六四）

●天地と分れし時ゆひさかたの天つしるしと定めてし天の川原に…（⑩二〇九二）

　これらの作品の傍点部「てし」は、前二者は「義之」、長歌では「大王」と原文では表記されており、それへの評

言であった。露伴が説明してくれる通り、「てし」は「手師」と書けるが、「手師」は手習いの師であるから書聖の王羲之（三〇七？―三六五？）を「てし」だとして「羲之」と戯れて書いたのである。その訓は本居宣長『萬葉集玉の小琴』（一七七九・成立）の施したもの。尚、羲は義の仮借体で『萬葉集』ではこれを使用している。

「大王」は中国での羲之の通称で、彼の子が小王と呼ばれ、父を大王と呼ぶ習いがあるので「か丶る戯を為した」。『萬葉集』で「てし」が「義之」と表記されているのは他にも五例あり、「大王」と表記されるのは露伴が挙げたものの他に三例あるが、これらの〈戯書〉も含めてこの歌集全体に現れる「てし」は、どのような表記になっているだろうか。順に全てを表にして列挙してみよう。表の中で、当該箇所はゴチック体にする。

巻	歌番号	原字	作品
2	一三一	置**而之**来	石見の海角の浦廻を…露霜の置き**てし**来ればこの道の…
	一三八	置**而之**来	石見の海津の浦をなみ…露霜の置き**てし**来ればこの道の…
	一五一	泊**之**登	かからむとかねて知りせば大御船泊**てし**泊まりに標結はましを
	一九九	定**之**水	かけまくもゆゆしきかも…常闇に覆ひたまひて定め**てし**瑞穂の国を神ながら太敷きまして…
	二〇七	似**之**不	天飛ぶや軽の道は…ひとりだに似**てし**行かねばすべをなみ…
	二一一	見**而之**秋	去年見**てし**秋の月夜は照らせども相見し妹はいや年離る
	二一四	見**而之**秋	去年見**てし**秋の月夜は渡れども相見し妹はいや年離る
3	二九二	泊**師**高	ひさかたの天の探女が石船の泊**てし**高津はあせにけるかも
	三四三	成**而師**鴨	なかなかに人とあらずは酒壺に成りに**てし**かも酒に染みなむ
	三九三	見**而思**香	見えずとも誰恋ひざらめ山の端にいさよふ月を外に見**てし**か
	三九四	定**義之**住	標結ひて我が定め**てし**住吉の浜の

	番号	原文	歌
			小松は後(のち)も吾が松
	四一一	植**而師**故	吾妹子(わぎもこ)がやどの橘いと近く植ゑ**てし**故に成らずは止(や)まじ
	四三八	纒**而師**敷	愛(うつく)しき人のまき**てし**きたへの吾が手(た)枕をまく人あらめや
	四八一	結**而石**事	白たへの袖さし交(か)へて…絶えじい妹(いも)と結び**てし**ことは果たさず…
4	六一九	縦**手師**其	おしてる難波(なには)の菅(すげ)の…磨ぎし情(こころ)を許し**てし**その日の極(きは)み…
	六五七	日**手師**物	思はじと言ひ**てし**ものをはねず色のうつろひ易き吾が意(こころ)かも
	六六四	言**義之**鬼	石上(いそのかみ)降るとも雨につつまめや妹に逢はむと言ひ**てし**ものを
5	八〇六	愛**弖之**可	竜の馬(ま)も今も得**てし**かあをによし奈良の都に行きて来むため
6	九〇八	見**壮**鹿	年のはにかくも見**てし**かみ吉野の清き河内(かふち)の激つ白波
	九六九	見**壮**鹿	しましくも行きて見**てし**か神奈備(かむなび)の

	番号	原文	歌
			の淵は浅(あ)せにて瀬にかなるらむ
	九七七	尓**弖師**押	直(ただ)越えのこの道に**てし**おしてるや難波の海と名付(づ)けけらしも
	一〇六五	定**而師**三	八千桙(やちほこ)の神の御代(みよ)より…百船人(ももふなびと)の定め**てし**敏馬(みぬめ)の浦は…
7	一二一七	見**之**善	玉津島見**てし**良けくも吾れはなし都に行きて恋ひまく思へば
	一二六四	買**師**絹	西の市(いち)にただひとり出(い)でて目並べず買ひ**てし**絹の商(あき)じこりかも
	一二八三	度**為**石	梯立(はしたて)の倉椅(はし)川の石の橋はも男盛(をざか)りに我(わ)が渡し**てし**石の橋はも
	一三二一	結**大王**白	世の中は常かくのみか結び**てし**白玉の緒の絶ゆらく思へば
	一三二四	結**義之**玉	葦の根のねもころ思ひて結び**てし**玉の緒といはば人解(と)かめやも
8	一四三〇	尓**手師**桜	去年(こぞ)の春逢へりし君に恋ひに**てし**桜の花は迎へ来(け)らしも
	一四六七	去**而師**香	ほととぎすなかる国にも行き**てし**かその鳴く声を聞けば苦しも

	番号	原文	訓読
	一五二〇	寐**而師**可	彦星は…玉手さし交(か)へあまた夜(よ)も寝(い)ね**てし**かも秋にあらずとも
	一六二二	見**師**香	吾(わ)がやどの秋の萩咲く夕影に今も見**てし**か妹(いも)が姿を
	一六二七	見**壮**鹿	吾(わ)がやどの時じき藤のめづらしく今も見**てし**か妹が笑まひを
9	一七二九	**敷弖志**所	暁(あかとき)の夢(いめ)に見えつつ梶(かじ)島の磯越す波のしき**てし**思ほゆ
	一七四七	継　**而**　零	白雲の竜田の山の…春雨(はるさめ)の継ぎ**てし**降れば上枝(ほつえ)は…
	一七八九	結**手師**紐	吾妹子(わぎもこ)が結ひ**てし**紐を解かめやも絶えば絶ゆとも直(ただ)に逢ふまでに
	一八〇九	見**而師**香	葦屋(あしのや)の菟原処女(うなひをとめ)の…隠(こも)りて居れば見**てし**かといぶせむ時の…
10	一八四三	極　**之**　賀	昨日(きのふ)こそ年は果**てし**か春霞春日の山にはや立ちにけり
	二〇〇二	告　　思	八千桙の神の御代より乏(とも)し妻(づま)人知りにけり継ぎ**てし**思へば
	二〇一九	挙**而之**服	古(いにしへ)ゆ上げ**てし**服(はた)も顧(かへり)みず天(あま)の川津に年ぞ経にける
	二〇六四	織**義之**八多	古に織り**てし**服をこの夕衣(ゆふへころも)に縫ひて君待つ吾(あれ)を
	二〇六六	逢**義之**有	月日選(え)り逢ひ**てし**あれば別れまく惜しかる君は明日さへもがも
	二〇九二	定**大王**天	天地(あめつち)と分れし時ゆひさかたの天(あま)つしるしと定め**てし**天(あま)の川原に…
11	二二九八	公依*事	たまきはる〔玉切〕代までと定め頼みたる君により**てし**言の繁けく
	二四三〇	思　始　**為**	宇治川の水沫(みなあわ)さかまき行く水の事反(かへ)らずそ思ひそめ**てし**
	二四七三	結　**為**　我	菅(すが)の根のねもころ君が結び**てし**我(あ)が紐の緒を解く人はあらじ
	二四八〇	継**而之**念	道の辺(へ)のいちしの花のいちしろく人知りにけり継ぎ**てし**思へば
	二五三三 或本	継**手志**念	面(おも)忘れいかなる人のするものそ我は〔言者〕しかねつ継ぎ**てし**思へば

		12
二五七八	触**義之**鬼	朝寝髪吾は梳らじ愛しき君が手枕触れ**てし**ものを
二六〇二	結**大王**心	黒髪の白くるまでと結び**てし**心一つを今解かめやも
二六七六	在 **而** 然	ひさかたの天飛ぶ雲にあり**てしか**君を相見むおつる日なしに
二七三四	生*鹿恋	潮満てば水泡に浮かぶ細砂にも吾はなり**てしか**恋ひは死なずて
二七四七	謂**手師**乎	味鎌の塩津をさして漕ぐ船の名は告り**てし**を逢はざらめやも
二八三四	言**大王**物	大和の室生の毛桃本繁く言ひ**てし**ものを成らずは止まじ
二八七八	宿**而之**晩	ぬばたまの寝ね**てし**夕の物思に裂けにし胸は止む時もなし
二八八〇	見 **壮** 鹿	現にも今も見**てしか**夢のみに手本まき寝と見れば苦しも
二九五〇	見**而之**従	吾妹子が夜戸出の姿見**てし**より心空なり地は踏めども
二九六一	継**而之**聞	うつせみの常の言葉と思へども継ぎ**てし**聞けば心迷ひぬ

		13
三〇二八	結**義***之妹	大き海の底を深めて結び**てし**妹が心は疑ひもなし
三〇六七	令レ蔓**之** 有	谷狭み峰辺に延へる玉葛延へ**てし**あらば年に来ずとも
三〇七〇	在去**之**毛	木綿畳田上山のさな葛ありさり**てし**も今ならずとも
三〇七六	告**而之**乎	住吉の敷津の浦のなのりその名は告り**てし**を逢はなくも怪し
三一七七	告**手師**乎	志賀の海人の磯に刈り乾すなのりその名は告り**てし**をなにか逢ひ難き
三二四五	得**之**旱物	天橋も長くもがも…い取り来て君に奉りてをち得**てしか**も
三二七二	聞**手師**日	うちはへて思ひし小野は…その里人の標結ふと聞き**てし**日より…
三三二九	始**而之**此	白雲のたなびく国の…万代に語り継がへと始め**てし**この九月の…
三三三四	言**手師**物	狂言か人の言ひつる玉の緒の長く

			と君は言ひて**し**ものを
14	三五三四	見多**弖思** 伊	赤駒(ごま)が門出をしつつ出(い)でかてにせしを見立て**し**家の児らはも
	三五五九	可多米**提** **之**許	大船(おほぶね)を舳(へ)ゆも艫(とも)ゆも堅めて**し**許曾(こそ)の里人顕(びとあら)はさめかも
15	三六二五	伎世**弖思** 奈	夕されば葦辺(へ)に騒(さわ)き…別れにし妹(いも)が着せて**し**なれ衣袖片敷きて…
	三六七六	衣**弖之**可 母	天(あま)飛ぶや雁(かり)を使ひに得て**し**かも奈良の都に言(こと)告げ遣らむ
16	三七九七	結**而為**友	死にも生きも同じ心と結びて**し**友や違(たが)はむ我も寄りなむ
	三八一六	蔵**而師**恋	家にありし櫃(ひつ)に鏁(かぎ)刺し蔵(をさ)めて**し**恋の奴(やつこ)がつかみかかりて
	三八七七	染**而之**衣	紅(くれなゐ)に染めて**し**衣雨降りてにほひはすともうつろはめやも
17	三九四八	由比**氏之** 紐	天離(あまざか)る鄙(ひな)に月経ぬ然れども結ひ**て** **し**紐を解(と)きも開(あ)けなくに
	三九五〇	由比**弖師** 比毛	家にして結ひ**てし**紐を解き放(さ)けず 思ふ意(こころ)を誰(たれ)か知らむも
	三九五八	伊比**氏之** 物	ま幸(さき)くと言ひて**し**ものを白雲に立ちたなびくと聞けば悲しも
18	四〇四〇	由吉**底***之** 見	布勢の浦を行きて**し**見てばももしきの大宮人(おほみやひと)に語り継ぎてむ
	四一三三	衣**天之**可	針袋これは賜(たば)りぬすり袋今は得**て** **し**か翁(おきな)さびせむ
19	四二三七	念**氏之**可 毛	現(うつつ)にと思ひて**し**かも夢(いめ)のみに手本(たもと)まき寝(ぬ)と見ればすべなし
	四二四八	見**氏之**彼	あらたまの年の緒長く相見て**し**その心引(び)き忘らえめやも
	四二五一	負**而之**将	玉桙の道に出(い)で立ち行く吾(われ)は君が事跡(ことと)を負(お)ひて**し**行かむ
20	四三二〇	欲妣多**天** **思**加	ますらをの呼び立て**し**かばさ雄鹿の胸(むな)別け行かむ秋野萩原
	四三二四	安比**弖之** 阿	遠江(とへたほみ)白羽(しるは)の磯と贄(にへ)の浦と合ひ**て** **し**あらば言(こと)も通(かゆ)はむ
	四三四七	伊波非**弖**	家にして恋ひつつあらずは汝(な)が佩(は)

	之加	ける大刀(たち)になりても斎(いは)ひ**てし**かも
四三五四	阿比美**弖****之**伊	立ち鴨(こも)の発(た)ちの騒きに相見**てし**妹(いも)が心〔己ゝ呂〕は忘れせぬかも
四四三三	奈里**弖之**可	朝(あさ)な朝(さ)な上がるひばりになり**てし**か都に行きてはや帰り来(こ)む

この表に現れる八十六例の「てし」の構造は、㈠接続助詞「て」+(プラス)強調・強意の副助詞「し」、㈡完了の助動詞「つ」の連用形「て」+回想の助動詞「き」の連体形「し」あるいはその已然形「しか」、㈢完了の助動詞「つ」の連用形「て」+強意・強調の副助詞「し」、㈣願望の終助詞「てしか」の一部、であるが、それらの「てし」の原表記を出現順に整頓してみよう。

「**而之**」―②一三二、一三八、二二一一、二二一四／⑩二〇一九／⑪二四八〇（或）／⑫二八七八、二九五〇、二九六一、三〇七六／⑬三三二九／⑯三八七七／⑲四二五一。十三例。

「**而師**」―③三四三、四一一、四三八／⑥一〇六五／⑧一四六七、一五二〇／⑨一八〇九／⑯三八一六。八例。

「**而思**」―③三九三。一例。

「**義之**」―③三九四／④六六四／⑦一三二四／⑩二〇六四、二〇六六／⑪二五七八／⑫三〇二八。七例。尚、⑫三〇二八の[2]「義」は底本が「美」で「みし」になっているのを諸本（元、類、紀、細、西貼紙）に依って改訂されたもの。（**桜**）、（**小**）。『玉の小琴』も既に「義」。

「**而石**」―③四八一。一例。

「**手師**」―④六一九、六五七／⑧一四三〇／⑨一七八九／⑪二七四七／⑫三一七七／⑬三二七二、三三三四。八例。

「**弖之**」―⑤八〇六／⑮三六七六／⑳四三二四、四三四七、四三五四、四四三三。六例。

「**弖師**」―⑥九七七／⑰三九五〇。二例。

「**大王**」―⑦一三二一／⑩二〇九二／⑪二六〇二、二八三四。四例。

「**弖志**」―⑨一七二九。一例。

「**手志**」―⑪二五三三。一例。

「**弖思**」―⑭三五三四／⑮三六二五。二例。

「**提之**」―⑭三五五九。一例。

「**而為**」―⑯三七九七。一例。

「**氏之**」―⑰三九四八、三九五八／⑲四二三七、四二四四

八。四例。
「底之」—⑱四〇四〇。一例。尚、この「底」は（元）では「氏」になっており（桜）、（小）は「氏」である。それに依れば「底之」の例は無くなり「氏之」の例が一例ふえる。
「天之」—⑱四一三三。一例。
「天思」—⑳四三二〇。一例。
以上、「てし」の六十三例には原表記が十八［十七］通りあることになる。
他に「てし」なる読みがある二十三例には八通りの表記がある。
「てし」に相当する原字がない零表記のもの二例。⑩二〇〇二／⑪二三九八。この後者の原字「公依」には、「きみにはよらめ」（新校）、「きみによりては」（塙）の異訓があり、（小）は「年きはる〔年切〕世までと定め頼みたる君によりては言繁くとも」である。これは直前の「しましくも見ねば恋しき吾妹子を日に日に来れば言の繁けく」（二三九七）に対する女性の答歌と取れるもの。
「て」が欠けていて「し」に相当する原字のみのものが次の三通り。
「之」—②一五一、一九九、二〇七／⑦一二一七／⑩一八四三／⑫三〇六七、三〇七〇／⑬三二四五。八例。
「師」—②二九二／⑦一二六四／⑧一六二二。三例。
「為」—⑦一二八三／⑪二四三〇、二四七三。三例。
「し」に相当する原字がなくて「て」だけのもの。「而」—⑨一七四七。一例。
「て」の原字がなく「し」が「しか」の上部で示されるもの。⑪二七三四。一例。この原字「生鹿」には「なりしか」（塙、注釋、全註）、「なれるか」（私注）、「いけるか」（岩、全註）の異訓があり、（小）は「潮満てば水沫に浮かぶ砂にも我は生けるか恋ひは死なずて」である。
「てしか」＝「而然」—⑪二六七六。一例。
「みてしか」＝「見壮鹿」—⑥九〇八、九六九／⑧一六二七／⑫二八八〇。四例。
尚、「てし」にはもう一例、「とし」と訛ったとされる表記がある。
●群玉のくるにくぎ刺し固めとし〔加多米等之〕妹が心は動くなめかも（⑳四三九〇）
「てし」の表記に「義之」「大王」などがあるのは、単な

る「閑戯」というよりは萬葉人の機智を示して余りある興味尽きない事象であろう。こういう表記を用いた作者ないし筆者の語感や感性、人柄、資質の表れであり、「てし」が「義之」「大王」と表記される作品そのものまでがそれだけで心なしか勝れてみえるから不思議である。

「閑戯」と言えば『萬葉集』には「しし」を「十六」、「くく」を「八十一」と表記した箇処が各々五例ずつある。

●…猟路の小野に十六［鹿］こそば…〈③二三九〉長歌

●…十六［鹿］じもの膝折り伏して…（③三七九）長歌

●…朝狩に十六［鹿猪］踏み起し…（⑥九二六）長歌

●…思ひ迷はひ射ゆ十六［鹿］の情を…（⑨一八〇四）長歌

●…射目立てて十六［鹿猪］待つごとく…（⑬三二七八）長歌

●情八十一思ほゆるかも春霞たなびく時に言の通へば（④七八九）

●あしひきの木の間立ち八十一［潜く］ほととぎすかく聞きそめて後恋ひむかも（⑧一四九五）

●若草の新手枕をまきそめて夜をや隔てむ二八十一［憎く］あらなくに（⑪二五四二）

●…高北の八十一り［泳］の宮に…（⑬三二四二）長歌

●…緒の絶えぬれば八十一りつつまたも…（⑬三三三〇）長歌

いずれも乗算の九九を使ったもので、四四十六、九九八十一、であるところからの戯れというか洒落である。乗算の九九[3]が既に使用されていたことを示している。

二 『萬葉集』と同族目的語法

英語では、「激しく闘う」「水夫生活を送る」「幸せそうに笑う」などを「激しい闘いを闘う」"to fight a fierce battle",「水夫生活を生活する」"to live a sailor's life",「幸せな笑いを笑う」"to smile a happy smile"と表現する仕方がある。成句のようになっているものも少なくないが、新鮮で生彩に富んだ表現にできる語法で、動詞と同系統・同語源の目的語を使用するので、こういうのを同族目的語（cognate object）を取る表現と呼ぶ。

『萬葉集』に類似の表現が見当る。「眠りを眠る」という形のもので〔「寝を寝」（寝る）〕（解）殆どが、眠りを眠らない、という否定形である。幾種類かの言い回しとなって

集中に次の表に挙げるように二十回現れる。現行の読み下しの表記を（小）に依って名詞を「眠(い)」、動詞を「寝(ぬ)」に統一することにして作中のそれぞれの原字を示しておこう。

巻	歌番号	原字	作品
1	四六	寐(い)も宿(ぬ)らめやも	安騎の野に宿る旅人うちなびき**眠(い)も寝(ぬ)らめやも**古(いにしへ)思ふに
	七一	寐(い)の宿(ね)らえぬに	大和(やまと)恋ひ**眠(い)の寝(ね)らえぬに**情(こころ)なくこの州崎廻(すさきみ)に鶴(たづ)鳴くべしや
3	三八八	寐(い)の宿(ね)かてねば	海神(わたつみ)は…この夜(よ)の明けむとさもらふに**眠(い)の寝(ね)かてねば**滝の上の…
4	四八五	寐(い)も宿(ね)かてにと	神代(かみよ)より…夜(よる)は夜(よ)の明くる極み思ひつつ**眠(い)も寝(ね)かてにと**明かしつ…
8	一四八四	寐(い)の宿(ね)らえぬに	ほととぎすいたくな鳴きそひとり居て**眠(い)の寝(ね)らえぬに**聞けば苦しも
9	一七八七	五十(い)も宿(ね)ずに	うつせみの…冬の夜(よ)の明かしも得ぬを**眠(い)も寝(ね)ずに**吾はそ恋ふる…
	一七八八	寐(い)も宿(ね)ず	布留山ゆ直(ただ)に見渡す都にそ**眠(い)も寝(ね)ず**恋ふる遠からなくに
10	二二二六	寐(い)の宿(ね)らえぬに	心なき秋の月夜(つくよ)の物思ふと**眠(い)の寝(ね)らえぬに**照りつつもとな
11	二五五六	寐(い)は眠(な)さずとも	玉垂(たまだれ)の小簾(こす)の垂簾(たれす)を行きかちに**眠(い)は寝(な)さずとも**君は通(かよ)はせ
12	二八四四	寐(い)の寐(ね)らえぬは	このころの**眠(い)の寝(ね)らえぬは**しきたへの手枕まきて寝まく欲(ほ)りこそ
	三〇九二	寐(い)を宿(ね)かねつる	白真弓斐太(ひだ)の細江の菅鳥(すがとり)の妹(いも)に恋ふれか**眠(い)を寝(ね)かねつる**
13	三二六九	宿(い)も寐(ね)かねてき	帰りにし人を思ふとぬばたまのその夜は吾(われ)も**眠(い)も寝(ね)かねてき**
	三二七七	眠(い)も睡(ね)ずに	**眠(い)も寝(ね)ずに**吾(あ)が思ふ君はいづく辺(へ)に今夜誰(こよひたれ)とか待てど来まさぬ
	三二九七	眠(い)も睡(ね)ずに	玉だすき…ぬばたまの夜(よる)はすがらに**眠(い)も寝(ね)ずに**妹に恋ふるに…
15	三六六五	伊能祢良	妹を思ひ**眠(い)の寝(ね)らえぬに**暁(あかとき)の朝霧

		延奴尓	隠り雁がねそ鳴く
	三六七八	伊能祢良 延奴尓	妹を思ひ**眠の寝らえぬに**秋の野にさ雄鹿鳴きつ妻思ひかねて
	三六八〇	伊能年良 延奴尓	夜を長み**眠の寝らえぬに**あしひきの山彦とよめさ雄鹿鳴くも
	三六八四	伊能祢良 要奴毛	秋の夜を長みにかあらむなぞここば**眠の寝らえぬも**ひとり寝ればか
17	三九六九	伊母祢受 尓	大君の…君が心を愛しみこの夜すがらに**眠も寝ずに**今日も…
20	四四〇〇	伊乎祢受 乎礼婆	家思ふと**眠を寝ず居れば**鶴が鳴く葦辺も見えず春の霞に

この表の表現を少し整理しておこう。

「寝〔眠〕の寝らえぬに〔は・も〕」―眠れないでいると。①七一、⑧一四八四／⑩二二二六／⑫二八四四／⑮三六六五、三六七八、三六八〇、三六八四。

「寝〔眠〕も寝らめやも」―寝てなどいられるだろうか。①四六。

「寝〔眠〕を〔も〕寝ず〔に、居れば〕」―寝〔もし〕ない。⑨一七八七、一七八八／⑬三二七七、三二九七／⑰三九六九／⑳四四〇〇。

「寝〔眠〕の〔も〕寝かてねば〔にと〕」―眠れずにいると、まんじりともしないまま。③三八八／④四八五。

「寝〔眠〕を〔も〕寝かねつる〔てき〕」―寝つかれないのは、眠れなかったのでした。⑫三〇九二／⑬三二六九。

「寝〔眠〕は寝さずとも」―お休みいただけなくても。⑪二五五六。

「安寝〔眠〕も寝ず[4]」――安らかな眠りを寝ない＝安眠しない、という表現が六例、

「味寝・熟睡（＝「男女が二人で共寝をする熟睡」（伊藤博『萬葉のいのち』塙新書）、「快い眠り、男女の愛の語らいの床」で「甘睡」と表記（小））は寝ず」が四例ある。

「夜寝〔眠〕も寝なくに」と「朝寝〔眠〕（＝朝おそくまで寝ていること）か寝けむ」が一例ずつ見当る。その他類似の面白い三例と共にそれらを表にして示してみよう。

巻	歌番号	原字	作品
5	八〇二	夜周伊斯奈佐農	…いづくより来(きた)りしものそまなかひにもとなかかりて**安眠(やすい)しなさぬ**
12	三一五七	安寐(い)も宿(ね)ずに	吾妹子(わぎもこ)にまたも近江(あふみ)の安(やす)の川**安眠(やすい)も寝(ね)ずに**恋ひ渡るかも
15	三六三三	夜須伊毛祢受弖	粟島の逢はじと思ふ妹にあれや**安(やす)眠(い)も寝(ね)ずて**我(あ)が恋ひ渡る
	三七七一	夜須伊毛祢受弖	宮人の**安眠(やすい)も寝(ね)ずて**今日今日と待つらむものを見えぬ君かも
19	四一七七	安寐(い)宿(ね)しめず	…あやめぐさ玉貫(ぬ)くまでに鳴きとよめ**安眠寝(やすいね)しめず**君を悩ませ
	四一七九	安宿(い)な寐(ね)しめ	ほととぎす夜(よ)鳴きをしつつ我(わ)が背子を**安眠(やすい)な寝(ね)しめ**ゆめ情(こころ)あれ
11	二三六九	味宿は寐(ね)ずて	人の寝(ぬ)る**甘睡(うまい)は寝(ね)ずて**はしきやし君が目すらを欲りし嘆かふ
12	二九六三	味宿は寐(ね)ずや	白たへの手本(たもと)ゆたけく人の寝(ぬ)る**甘睡は寝(ね)ずや**恋ひ渡りなむ
13	三二七四	味眠は睡(ね)ずて	せむすべの…ぬばたまの黒髪敷きて人の寝(ぬ)る**甘睡は寝(ね)ずて**…
	三三二九	味寐は宿(ね)ずに	白雲の…ぬばたまの黒髪敷きて人の寝(ぬ)る**甘睡は寝ずに**…
5	八三一	用伊母祢奈久尓	春なればうべも咲きたる梅の花君を思ふと**夜眠(よい)も寝(ね)なくに**
10	一九四九	朝宿か寐けむ	ほととぎす今朝の朝明(あさけ)に鳴きつるは君聞きけむか**朝眠(い)か寝(ね)けむ**
8	一五二〇（一に云ふ）	伊毛左祢而師加	彦星は…玉手さし交(か)へあまた夜(よ)も**眠(い)もさ寝(ね)てしか**秋にあらずとも
14	三四一四	佐祢乎佐祢弖婆	伊香保ろのやさかのゐでに立つ虹(のじ)の現はろまでも**さ寝(ね)をさ寝(ね)てば**
	三四九七	左宿佐寐弖許曾	川上の根白高萱(ねじろたかがや)あやにあやに**さ寝(ね)さ寝(ね)てこそ**言(こと)に出(で)にしか

「眠もさ寝てしか」（朝おそくまで寝ていたのでしょうか）⑧一五二〇（一に云ふ）と「さ寝をさ寝てば」（堤防に立つ虹のように人目につくほど十分寝られたからは）⑭三四一四、は肯定で使われている。「さ寝さ寝てこそ」⑭三四九七、は「眠りに眠った」と強調したもので同族目的語法とは言えないだろうがその仲間に入れておこう。尚、⑪二三六九は、（小）は「甘睡も」と旧訓を採るが、ここでは多くの訓を採って「は」に統一した。「味寝」は四例とも「人の寝る」（世の人並みの）あの熟睡だ、とするのが興味深い。

「眠り」を「眠る」の『萬葉集』での原表記は、表音方式は別にしてこの表に現れているだけでも、名詞「い」は「寐」「宿」「眠」があるが、それは「漢字には「い」のように全く名詞的にのみ用いる語がなく、従って「い」の正訓とすべき適当な字がない」（**字訓**P・一〇〇）からだという。動詞の「ぬ」にも上記の表には、「宿」「寐」「睡」「眠」がある。紛れもなく名詞と動詞は同族であった。

熟睡を睡眠せず、安眠、甘美な眠りを眠らずと、成句のように用いられている同族目的語法を整頓してみた。「安寝」には、「安く寝る」という表現も集中には現れる。

●さ寝る夜は多くあれども物思はず安く寝る夜は〔夜須久奴流欲波〕さねなきものを ⑮三七六〇。

寝る夜は多いけれど物思いに耽らず安らかに寝る夜は全くないものだ、と流刑に処せられた身を嘆く中臣朝臣宅守の歌。

●たらちねの母を別れてまこと我旅の仮廬に安く寝むかも〔夜須久祢牟加母〕⑳四三四八。

母と別れて旅の仮小屋などで私が本当に安眠できるわけがないでしょうと、これも安らかに眠れないと訴える。

尚、●しきたへの枕動きて寝ねらえず〔宿不レ所レ寝〕物思ふ今夜はやも明けぬかも ⑪二五九三 も「眠れない」の意で、原文には、「宿」と「寝」が用いられている、⑪二五五六の「寐」は「眠」さず〔寐者不レ眠〕と同じように。

最後に、「嘆く歎きを」なる同族目的語法を思わせる面白い表現に触れておきたい。原文では「嘆久嘆乎」となっている次の作品である。

●ますらをの思ひわびつつ度数多く嘆く歎きを負はぬものかも　（④六四六）

やたらに嘆いたりはしない堂々たる男子である筈の私が、幾度となく嘆いては嘆息を洩らすのです。そのようなことをさせるあなたは、その報いを身に受けないものでしょうか、と訴える。

こういう歌を贈られた萬葉時代の女性は、この「ますらを」に如何なる反応を示したであろうか。

ついでに？同じような表現、●…八尺の嘆き嘆けども〔八尺乃嘆嘆友〕（大きな溜息をついて嘆いても）…（⑬三三四四）を挙げておこう。

三、換喩の妙――「直香」

「ただか」なる優雅で至妙な語彙が『萬葉集』では六回使われる。「直香」（二回）、「正香」（三回）、「多太可」（一回）と表記されるので、最初に現れる「直香」でここでは代表させよう。原義は文字通り、直かの、正しき香りで、その人独自の、固有の匂い、である。

●吾が聞きにかけてな言ひそ刈り薦の乱れて思ふ君が直香そ（④六九七）

私に聞こえるように言わないで下さいよ、刈り取った薦が乱れるように思い乱れて恋い慕っているあの方のことを、という、君なる憚り多い女性への思慕を表明して、彼女への好意的でない話し振りをする第三者を窘めている男の歌である。

この作品が示すように「直香」は、その人の放つ香りでその人そのもの、その本人の実状、延いては真価を示す表現になっている。発散する匂い、などというそのものと関わりのある事物でその本体を表出するような譬喩を、「換喩」'metonymy'と呼ぶが、婉曲典雅なこの「直香」など、集中屈指の佳語であろう。この語は、次には大きく離れて巻第九の、笠朝臣金村の歌の中に出ているという長歌の結語に現れる。

●うつせみの世の人なれば…吾が着たる衣は穢れぬ…冬の夜の明かしも得ぬを眠も寝ずに吾はそ恋ふる妹が直香に（⑨一七八七）

出張先で官人が、着ている衣服が汚れてきたのを見ながら、明かしかねた冬の寒夜を寝もやらず、妻を恋しがっている作品である。

次は更に遠く飛んで、巻第十三の短い長歌に結語として現れる。

●み吉野の御金(みかね)の岳に…その雨の間なきがごとく　その雪の時じきがごと　間も落ちず吾(あれ)はそ恋ふる妹が正香(ただか)に　(⑬三二九三)

山に絶え間なく雨が、休みなく雪が降るように、絶えず私はあの娘(こ)そのものを恋しく思っている、という作品。

以上三首の「直香」は、男性が女性を指しているものだが、次の二首は妻が夫を指してのそれである。女性が男性のことを言っている。

●聞かずして黙(もだ)もあらましを何しかも君が正香(ただか)を人の告げつる　(⑬三三〇四)

これはその直前の長歌

●里人(さとびと)の吾(われ)に告ぐらく　汝(な)が恋ふる愛(うるは)し夫(づま)は　もみち葉の散りまがひたる神奈備のこの山辺(へ)から　ぬばたまの黒馬に乗りて川の瀬を七瀬渡りて　うらぶれて夫は逢ひきと人そ告げつる　(⑬三三〇三)

「里人が私に告げてくれることには、お前さんの恋しがっている夫は黄葉の散り乱れる山辺を黒馬に乗って、川瀬を七瀬も渡って他の女に逢いに行ったよ」の反歌で、「聞かないで黙っていればよかった、何だって夫の様子を人は告げたのだろう」となまじっか里人に訊ねたばかりに、足の遠退(の)いた夫の実状・本質が分って後悔している女性の作品である。

長歌の反歌は、大抵は、その長歌の内容の要約や一部、あるいはその補い、であることが多いのだが、この長歌と反歌は一対で、作者が聞き知った事実とそれに対する作者の思いとの表明になっていて、この一組で内容が完成する仕組になっている。共に秀歌と言ってよかろう。長歌には「愛(うるは)し夫」[5]などという新鮮に響く素晴らしい語彙もある。

この作品の間近に、三度目の「正香」が出てくる。巻第十三に「正香」が連続して三回集中している。

●大君(おほきみ)の命(みこと)恐(かしこ)み…大船に…行きし君いつ来まさんと…人の言ひつる　我(あ)が心筑紫の山のもみち葉の　散り過ぎにきと　君が正香を　(⑬三三三三)

「…大船に乗って漕いで行った君は何時お帰りなのかと占いをして斎(い)み慎んでいると…人が言ったのか、私が心を尽して聞いていると筑紫の山の黄葉のようにはかなく散り過ぎてゆかれましたよ、という君の実の姿、状態だった」というもの。

次の作品は、大伴池主が家持に贈った長歌で、男性が男性を「直香」で指している。男が女を、女が男を、男が男

を、の三通り、「直香」の指すものが『萬葉集』には存在することになる。

●あをによし奈良を来離れ…幣奉(ぬさまつ)り我(あ)が乞い禱(の)まく　はしけやし　君が多太可を…　（⑰四〇〇八）

「私が幣を捧げてお祈りするのは、慕わしいあなた様その人の無事であって…」と言う。

先刻の「安寝」にしろ「味寝」にしろ、現代に甦らせたい佳語だと思われるが、後者など、甘美な共寝の熟睡によって男女二人の親密な関係を指すとすれば、これも見事な換喩の一種である。「直香」だけでなく、「衣」で着ている人を、「船」でそれに乗っている人を、など、巧妙に表す換喩が、他にも『萬葉集』には少なくないが、その詳細は稿を改める。

注

（1）本稿は、西本願寺本萬葉集を底本として、竹柏會複製西本願寺本萬葉集を使用し、引用・言及の表現の字体は印刷上及び現代の一般読者の便宜上、現行の文字を原則として使用する。
現行の、漢字仮名混じりの読み下し表記については本稿は、新編日本古典文学全集『萬葉集』（一）～（四）（小島憲之・木下正俊・東野治之校注・訳）小学館（一九九四～九六年）――以下本稿では**（小）**と略記――に原則として依拠する。若干の改変は原文の借字（萬葉仮名）に対する筆者のある拘泥(こだわり)（原文の我と吾や、心と情はそのまま生かしたいなど）と現代文表記への極く個人的な好みに依るもので全く他意はない。以下の文中、例えば、③三九四、は、巻第三の三九四番歌（旧國歌大観番号）という意味。
参照文献表は後ほど一括して挙げるがここでは以下の三点を略記付号と共に記すに留める。

（桜）萬葉集　鶴久・森山隆編　桜楓社　昭五九

（字訓）字訓　白川静　平凡社　二〇〇三

（解）例解古語辞典　小松英雄主幹編　三省堂　第三版　一九九二

（2）以下本稿でのこの種の略記は**（桜）**に依っており、左記の、筆者の既発表萬葉考二篇にも列挙してあるが、本稿続篇の最後にまとめて記すことにする。

（3）他には次の例が見当る。

●…万代にかく二二(しし)知らさむ…（⑥九〇七）長歌

●よしゑやし二二(しし)〔死〕なむよ吾妹生けりともかくのみこそ吾が恋ひ渡りなめ（⑬三二九八）

●…間使ひも遣らずて吾は生けりともな重二(し)（⑥九四六）長歌

●犬上の鳥籠の山なる不知哉川いさ二五(とを)聞こせ我が名告らすな（⑪二七〇二）

「二二が四」であり、「二二」を「重」ねれば「四(し)」になる。「し」を「四」で表記する例はその近くにも「船二四(にし)あるらし」（⑥九三四）、「四(し)きる白波」（⑥九三七）、「水鳥(う)二四もあれや」（⑥九四三）など幾らもあるので変化を求めたのだろう。「二五」は「十(じゅう)」ではなく「十(とを)」だったのか。いずれにしろ「十六」で「しし」を、「八十一」で「くく」を表す方式なら「四」で「にに」を、「十」で「にご」を表しそうなものだが、これらはその逆なのが面白い。

（4）『竹取物語』にも冒頭部近く「世界のをのこ、貴(あて)なるも賤しきも」で始まる箇処に「夜は、やすき寝(い)も寝ず」と出てくる。この表現を含む一節は、ヨバフの起源に関しての一例証として、小松英雄『伊勢物語の表現を掘り起こす』（笠間書院・二〇一〇）――この新刊書もこの著者に常の如く、画期的な発見と瞠目すべき鋭い洞察に富む名著――が引用（p・二四九）していた。

（5）〈つま〉については左記の拙稿㈠に詳説した。

拙稿

㈠「『萬葉集』の〈こころ〉と〈つま〉たち」『文藝言語研究・文藝篇』31（筑波大学文芸・言語学系）一四五―一八四ページ　一九九七年三月

㈡「『萬葉集』の言(こと)――詩歌の本質」『文藝言語研究・文藝篇』32（筑波大学文芸・言語学系）一二七―一五〇ページ　一九九七年十月（『日本語学論説資料』第34号第3分冊四〇〇―四一一ページに再録）